

え？俺が山吹 純？

クレナイ・改

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通に生まれ、普通に生きて、普通にアニメ&ゲームがちよつとした趣味な26歳サラリーマンが通り魔に刺され、転生したのはバンドリの世界だった!?

皆さんこんにちはこんばんはクレナイ改と申す者です。ぱつと思いつきで書き始めた

適当?な作品なので失踪覚悟で読んでくださいw

Twitter←

<https://twitter.com/kst2043505>

目次

本編

誕生、山吹 純(26) | 1

影 | 6

l o s s i d e n t i t y | 13

l o s s i d e n t i t y 0 2

21

きっかけ | 28

人生突っ走ってなんぼ | 32

ココロヲユラスモノ | 41

ココロヲユラスモノ後編 | 49

事情を説明しまくるのは疲れる…… | 62

亀裂 | 68

再開 | 76

悩み、打ち明けし時 | 80

番外編

山吹家の夏休み | 87

番外編：山吹家の夏休み中編 | 90

山吹家の夏休み後編 | 94

番外編：純くんのソロライブ | 99

本編

誕生、山吹 純（26）

4月、それは出会いと別れの季節。とか言われているが、26歳の俺からして見ればそんなこともなく、いつもどおりに出勤する。

いつものスクランブル交差点、信号が変わり、横断歩道を渡る。

ザシュ。？なんだかものを刺された音がした、痛い、ナニ、コレ

腹にナイフ？包丁？とにかく刃物が刺されていた、そこで意識が途切れる。

気が付くと目に見えるのは手術室と思われるところにいた

（ああ助かったのか）

こんな事を思っていると、すぐ隣から女性の声がある。

「よかったですね！元気な男の子ですよ!!」

は？俺は助かったんじゃないの??

大体わかった。俺は死んでこの子に生まれ変わったんだ、きつとそうだ。転生??というものらしい、

いや、神様からのチート能力は? スマホは? 異世界は? と最近はやっているラノベを思い出していると急にドアが開く、

「またせたなあ!!」

何やら元気のいいおじさんが小さな女の子を連れて来た。

「あなた」

俺をだっこしている女性が呟くたぶんお母さんだろう。

「おお、本当に男の子なんだな……。」

「ええ、あなたと私の純よ」

「そうだな……ほら沙綾お前は今日からお姉ちゃんになるんだぞ?」

「そうなの?」

小さい女の子がそう返事する。そしてすごい眠気が俺を襲う

もう……ねむい……

それから俺は赤ちゃんとして全力で振る舞うことにした。なぜって？さすがに生まれてすぐの子供が流暢にしゃべりだしたら怖くね？

(誰に言ってるんだろ)

お父さんとお母さんの会話を聞く限り俺は山吹 純という名前らしい。

そして一歳年上姉の名前が山吹 沙綾らしい。

……ん？山吹沙綾？バンドリの？マジで？

でも公式設定だと純と沙綾ってめっちゃ歳離れてなかったっけ？

ここで考えられた結論は俺の魂がこの世界に介入したことにより設定が変わった。

という結論に至る。正確には難しいというかもこういう誰かに押し付けられた運

命と、言うしかないと、

途中から考えることを放棄した。

まあ二度目の人生だ気楽に楽しもう!!

五年後

俺は幼稚園生の年長さんになった。

ちなみに精神年齢31歳

そんな俺は幼稚園は地獄だった（建前）まあそれなりに楽しんでる。

みんなとは26歳差がある中、孤立しなかった。何故かというところ。

ある時は問題児を口で沈めたり、ある時は喧嘩を沈めたり、ある時は先生の愚痴を聞いたり、ある時は列の整理を先生の代わりにしてた。

もう小さい先生みたいなやつになってしまった。

さすがに先生や親に（こいつ大人過ぎない？）と思わせる結果に、まあもうみんな見慣れてるし

最初のほうは、子供たちが無邪気過ぎて先生が困っているととこころに俺が助けに入る
と先生は

「なんで君はそんな若いのに心配りができるの？まあすごく助かるからいいや・・・。」
と、途中から、先生や大人が思考放棄していた。幼稚園の先生は大変だな。

一人でこんなことを考えていると、また誰かと誰かが喧嘩し始めた。
「このどんぐりは僕が見つけたの!!」

「いいや僕だ!!」

「おいおい少し落ち着けてどうしたどうした」

「あいつが僕のどんぐりを取ろうとするんだ!」

「違うよ!あいつが取ろうとしているんだよ!」

「大体わかったこのままおとなしくついてくるんだ」

「よしここでドングリをすきに拾えば仲良くなるだろ？」

「うおおドングリいっぱいだ！」

「いっぱいだああああ」

幼稚園に入っしてしばらく幼稚園の人気スポットなどは把握済みである。

その辺の情報はほとぼりを沈めたり、わがままな子を説得したりに使ってるこの情報は先生または保護者同士で共有してある。

それによりこの幼稚園の子は聞き分けがいい子が多かったりしている。

そんな毎日でした。はい

あの幼稚園の先生生活から一年、俺は小学一年生になった。

姉さんは小学二年生に……。俺のうちはパン屋をやっていて姉さんも小学校に入学してから、

家の手伝いを始めていた。これは幼稚園の年少の時営業を手伝おうとしたら親に全力で止められた。

「なんで？」と聞いたら「まだ小さい姉ちゃんもしてないでしょ」と言われた、ので「なら小学生から手伝いたい」と言ってみた親も下がった。それを聞いた姉さんは「私もやる！」

と言っていた。相変わらずええこやん？素敵やん？さて、と姉さんと俺は

はいまパンの仕込みをやっているところだ。レジには母さんがいるレジが込み合ってきたら、俺が列の

整理をやったり、小さい体を生かしパンの補充などをしていた。そのテクニクを姉さんに教えてたりしてたら……。

その結果親の苦勞が少しでも軽くでき、なんと妹が生まれることに……。

え？妹ももつと遅く生まれるはず……。これも俺の活躍で設定が変わってしまったのか？

二か月後

次女が生まれるので母は入院中でいない。

しかし家事の手伝いは終わらないので、朝ご飯を作っている父さんの所に行った。

「父さん、何か手伝えることは？」

「ん？そしたら……。洗濯物畳んでおいてくれるか？」

「おk！ついでに姉さん起こしてくる！」

「おう！たのんだぞー」

毎朝こんな感じで過ごしている。

前の人生では家の手伝いとかしてなかったし人に頼られるってなんかいい感じ♪
洗濯物が畳み終わり、姉さんをおこしに行く。

「姉さん、起きてーご飯だよー。」

体をゆさぶりながら言葉を放つ。

「んう、おはよ、純」

「ん、おはよう、姉さん、朝ご飯あと少しでできるから顔洗っておいで」
「うん」

姉さんは笑顔でうなずいた可愛いさすが沙綾かわいい

「「いただきますー！」」

みんなで朝食を食べる。うん、相変わらずパンがうまい！

ご飯を食べ終わり父さんに今日の予定を聞く。

「父さん今日の予定は？」

「今日は店を早く閉めてお母さんの見舞いに行くよ」

「え、早く閉めちゃうの？パンの仕込みあんなにしたのに？」

「そうだよどうするのあの量」

と姉さんが大量の仕込みを指さす。

「やっべ……。」

「おいおい……。」

「はあ、いいよ行つてきな俺はレジできるし。」

「私も手伝う！」

「お前ら……」。

「もう何回もレジやってるからもうわかるわ」

「だからお父さんは安心してお母さんのところに行つてね？」

「ありがとうな！ やつぱり最高の子供だぜ！ お前らはよう！」

「じゃ、仕込みした分早く焼いちまおうぜ、俺はまだできないし」

「危険だからまだ教えるつもりもないしやらせるつもりもないぞ」

「こんなどうでもいい会話でもほんとに楽しい家族なんてそうそういないぞ。」

「こんな時間が永遠に続けばいいのに」

「ん？ なんか言つたか？ 純」

「いや、何も？」

声に出てたか、まあいいや俺はお店の掃除をしている姉さんの所に行く。

「姉さんなんか手伝えることある？」

「ううん、大丈夫だよ、ありがとう！ 純！」

「今日は頑張ろう姉さん」

「うん！」

やばい、うちの姉可愛くない!? マジかわいすぎて尊死しそう。まじで

「純、沙綾そろそろパンが焼きあがるから運ぶの手伝ってくれー!」

相変わらず元気な声のする人だ♪

「行こう? 姉さん!」

「うん!」

この日は曇っていて雨が降りそうだがそんなの気にしなかった。

30分後

「ありがとうございます。また、どうぞお越してくださいませ。」

朝ご飯を買いに行くサラリーマン、OLさんの常連さんを見送るのが日課になって来た。

このまま時間が過ぎていき、気が付いたらお昼になっていた。

「よし、そろそろ時間だ」

「お父さんもう行く?」

「ああ、夕方まで頼むぞ」

「うん、大丈夫だよ」

「それじゃ」

「ばいばい」

姉さんが手を振りながら挨拶をする。

「ん？」

入口の近くの電柱の裏に何かいる？人？まあいいか。

そろそろ夕方になって学校帰りの高校生や

仕事帰りの社会人さんの対応を終えて、そろそろ店を閉める時間だ。

「よし、そろそろ閉めよう、姉さん掃除お願い。」

「ハイ」

元氣よく返事した姉さんが売り場に向かう。

外は雨が降っている……。

カランカラン

「いらつしやいませー」

姉さんの声がする。さては札出してなかったな。

「いらつしやいませー」

なんだこの、人黒いフードかぶってサングラスしてる外こんなに雨降ってて暗いの
に。

「今このお店の人は君たちだけかな？」

「はい、そうですが。それが何か？」

「やっぱりそうなんだあ♪予定通りだあへへっ」

男はそう言いながらフードを外す。

「今から君たちの絶望した顔がみたいなあ♪」

l o s s i d e n t i t y

「おじさんなに言ってるの？」

「言葉の通りさあ♪」

なにを言ってるんだ？こいつ今何を……。

「へへっその男の子もさあこっち来て一緒に楽しもうよ♪」

こいつ……。まずい……。

どうする？嫌、何を悩んでいる!?家族を守るのがいけないなんてことはないだろ!?

「何をするつもりだ!!」

転生して初めて声を荒げる。それを見た犯人は。

「んうこの子ほんとにおもしろいなあこんなこはじめてだよお！」

??『こんな子初めて』?日本語が間違いでなければ俺たち以外にも被害にあった子供が!?

「おい、一ついいか」

犯人に確認をする、まあ無謀に等しいが。

「んう？なあに？？」

聞くんかい、まあいいこれで時間を稼いで……。つて姉さん!?なんで動かない!?俺たち以外に子供を殺したことがあるのか?」

どうした!?姉さん!早くこつちへ!!姉さんが動けないなら……。

「ああそうだよお?このナイフでねえ!?こうやってさあ!!」

まずいつ!犯人は姉さんの腕をつかみそのままナイフを当てる……。

「痛い、痛いよ、純、助けて!」

姉さんの腕から紅い水が滴る。

「ああこの顔を見るために俺は毎日生きてるのさあへへっ」

オマエノセイダ……。何かが消える音がした。

俺は犯人との距離を縮める。

「そうだよ!!そう!!このまま!このまま早く!!こつちへえ」

ソノママ、ユツクリ、ユツクリ、

「ん?何を持つてるの?箒?」

俺は沙綾の持つていた箒を持ち上げる、よくある学校の箒を。

その箒は先端のパーツが外せるのでいらぬ部分を外すもう箒はただの棒になった。

もう……。覚悟は決まった。

こいつを殺す!!

「!君、何者?」

「どういうことだ?」

「だって君……」

なんだつていいじゃないか。

俺は……。

オレハ……。

「僕と同じ目をしているね♪」

「うるせえええええええええええええええ」

声を枯らす勢いで叫びながら少し尖っている棒をやつの首元に向かって突き刺す。

ただそれだけで二人とも助かる。ゼツタイニ。

ただ、ほんの一瞬だった棒ははじかれ体制を崩した俺は腹を蹴られ、

壁に勢いよく吹っ飛ば、漫画みたいにめり込むわけでもないが、かなりの勢いで衝突する。

「ガ、ハ」

「へへっ君やっぱり何かに狂えるものだねえ♪」

意識が朦朧する。それでも相手から目を離さない。

ザシユ

あの時と同じ音

「お前も、俺と変わらないね♪」

奴は最後の最後で笑顔だった。

この言葉を聞いた途端意識が途切れる。

沙綾 s i d e i n

腕が痛いとにかく痛い、でも、こんな事で嘆いてられない。
とにかく警察110番しなきゃ。

純が繋いでくれた命を……。

この暖かい命を……。

「もしもし、警察ですか？」

わずか10分立たずに来てくれるとは思わなかったが案外「強盗が入ってきた」と通報したらすぐに来てくれた。警察の人が入ってきた途端、応援を呼び、

私は保護され、純は救急車で運ばれた。

私は病院だけがの治療を受け、カウンセリングを受けることになった。

純はしばらく、意識が戻らず、医者からは目覚めるまで時間がかかる、と言われた。

二週間後

父さんは何度も純に謝っていた。

「ごめん、ごめんよ純」

「父さん。」

「沙綾、どうしたんだ？」

「純は、純はね？ 私に逃げるように時間を稼いでいたんだ」

「うん」

父さんは黙って返事する。

「でも私は逃げれなつた怖くて足が動かなくて。」

「そしたら純は……。」

私は責任感に押しつぶされ、泣き出してしまふ。

「私は、私はっ純に謝つても許されないことをっ」

その時、温かいものが私を包む。父さんだった。

「大丈夫さ、純なら父さんはともかく沙綾は許してくれるさ」

そんなことない、父さんも許してもらえる。

と言おうとした途端。

「父さんも姉さんも誰も悪くない……よ」

「純!」

純が目覚める。

気が付いたら暗い所にいた。

「死んだのか？」

「イヤ、チガウ」

「誰だ!？」

「オレハ、オマエダ」

「は？」

いや違う、そんなわけないだってその姿は、

その姿はしばらく見てないが、はっきりわかる。

目の前に立っていたのは

生前の俺の姿をした何かだった。

l o s s i d e n t i t y 0 2

「どういう、ことだよ」

俺はオレに聞いてみる。

「どうもこうもないさお前だつて理解してるはずだぜ」

どう、言う……。

「まだオレ、ならな」

「俺は、オレだ！」

「おいおいマジかよこいつ」

おかしい、俺は、俺のはずだ……。

「おまえ……。自分の名前、わかるか？」

「オレは、斎藤拓真だけど？」

「マジかよ。」

「まさか俺たちが出会っちゃったのか。」

「何を言ってるんだ、薄々わかってんじゃないか？」

「それは、どういう？」

「オレがお前だつて俺がオマエであるようにだ」

「混ぜてる？マゼラレたのか!？」

「そうだオレはオマエなんだよ」

「アアソウダ、俺は、オレなんだ」

「そう思った瞬間、オレは俺に近づいて俺を抱きしめる。」

「いったい・・・何を」

「俺の腹には剣が突き刺さっていた。」

「お前は山吹純であり、斎藤拓真なんだよ」

「斎藤拓真が山吹純に入ってくる」

記憶

経験

知恵

体

神経

脳

「斎藤拓真という人間が山吹純に入ってくる」

「うっぐうううう」

俺は耐えれず声を上げる。

「コレデヤットヒトツニ」

斎藤拓真の姿が消え、鉄が落ちる瞬間、周りが真っ白になった。気が付いたら、父さんの声が聞こえる、

「ごめん、ごめんよ、純」

何謝ってるんだ誰も悪くないのに。

そう言いたくても体が動かない。

なんで。

なんでだよ!?

動け。

体に命令する。

動け。

脳が命令する。

それでも体は動かない、目の前で悲しんでる人間がいるのに。

どうしてだよ!?

動けよ！今動かなきゃ誰が、誰がこの人を癒すというんだ原因のオレが！

自分の中で自分の体と戦う。

そうしていると誰かが入ってくる。
目には見えないけど声でわかる。

姉さんだった。

姉さんの声が聞こえる。

泣いている

慰めなきや

『大丈夫だよ』って

言わなきや

俺が癒さなきや。

俺が

オレが

違う

俺だ!!

その時、声が出た

「父さんも姉さんも誰も悪くない・・・よ」

「純！」

一週間後

意識が戻り、そこからは一週間がたった。

合計で三週間も学校を休んでしまったが、精神年齢40代をなめてもらっては困る。

と言わんばかりのテストオール100点。

「お前はほんとに現役小学生かよ……。」

「ほんとにね……。」

姉さんと父さんに流石に引かれた。

「いや、三週間の穴埋めを本気でやりまくったらこんなことに」

「これが本当の無自覚って奴か」

「私も頑張らなきゃ」

ホントダヨーいやほんと無自覚って恐ろしい（他人事）

しかしあんな事起きてもうちは明るいなあ

バンドリだと確か、お母さん体弱いか言われてるけどめちやくちや元気ですやん。

……。あれ、まてよ、このままだと姉さんはポピパに入らない!?

どうしよう……。

……。まあいつか!

ずいぶんと適当すぎるだろって?

いやいやこんな誰かに押し付けられた運命の影響で、設定が変わり続けている今

元に戻すのも無理やん? マジこれからじたばた動いてもしょうがなくなる?

と、言うわけでこれからはなるようになれ、という人生にする。

いつまでもあたふたしても落ち着かないし。

これに関しては、沙綾の人生だから選択権は沙綾にある。

決して誰かにいじれる代物ではない。

流石に大人だからその辺はちゃんと理解してる。

小さい頃の選択はいずれの進路にもすごく関わってくる可能性が高いから

しっかり考えてほしい。

カランコロンとドアが開く音がする。

「いらつしやいませー」

今日も元気よく店の手伝いを始める。

きっかけ

お店の強盗？襲撃？から1年、姉さんは小学3年に、俺は2年生になった。

俺は何も変わらない日々になんか幸せを感じながら毎日過ごしている。

しかし1つ疑問、否、挑戦してみたいと思ってることがある。

それは、『楽器』である、ここはバンドリの世界であってパン屋をメインにやることはない、せつかくの2度目の人生、少し高望みしてもバチは当たらんのだろ。

しかし急にやるにしても、ちゃんとできるのか？という不安がある、なぜかという生前、ギターを始めようとして中古のアコースティックギターを購入したのだが、全然できず、ギターがホコリ被ってしまったのだ。

しかし、あの戸山香澄でさえ、1週間と少しでエレキギターを習得していた。だとすればこの俺でもできるのではないのか。

と、言う勝手な仮説を立ててみた。

だとしてもだ。

いざやってみようと楽器店に学校帰りに寄り道してみたら、

「……………」

「やっぱり高い……。生前の俺なら迷わず買っていたが、今は斎藤拓真じゃなくて山吹純である。」

「しかもいえば俺は社会人じゃなくてただの頭のいい小学生だ。こんな大金払えん。」

「ちなみに眺めているのは、エレキギターの」

「エクスプローラーというギターだ。若い頃、一目惚れをしたが、値段をみて諦めた代物である。」

「はあ、帰るか」

「何してるの？」

「お、美紅じゃん」

「帰ろうとしたら女の子に話しかけられる。」

「この子の名前は『佐々木 美紅』何気に幼稚園の頃からの幼なじみである。」

「音楽やるの？」

「んーでもなあギター高いし……。」

「でももしやるなら純の奏でる音楽しみだな」

「……。ありがと」

「だがしかし、そんな高いもの買ってもらえるわけがない。」

はずだった。

「え？ギター？」

「うん、次の誕生日に買って欲しいんだ」

「なるほど、お前から純粹にこれが欲しいと聞けて父さん嬉しいぞ！」

「え？どゆこと？」

「ほら、今まで何か欲しいものと聞いたら

特にないからご飯でも行こうと言ってばっかじゃないか。」

「そうだった？」

そんなに欲が薄いと思われてたのかよ。

「だからこんなにお前のプレゼント代が溜まりに溜まって今や20万だぞ？」

「!？」

ってことは!？」

「さあギターを買いに行こうじゃないか！」

それにしてもこの父親ノリノリである。

楽器屋さんに着いた。そこで、ある程度の知識は手に入れた。お店の人からメンテナンスの仕方、などを教わって必要なものを揃えて、帰ろうとした。

「父さん。」

「ん? どうした?」

「このことは姉さんにはいわないでほしいんだ、いや、このことは父さんと僕の秘密ってことは駄目かな?」

「? どうして?」

父さんは首を傾げてこちらを見る。

俺は真剣な眼差しで父さんを見上げる。

「小さい頃から練習を積んで、姉さんとか、ほかの友達とかをびつくりさせたいたい。」

「..... そうか、かつこいいじゃないか!」

やっぱりそう来たか。

この父親のことだから、こういう男らしい? の好みだと思つたぜ。

「じゃあすぐうちに帰らないと紗綾にバレるぞ」

「それもそうだね」

こうして俺は何も変わらない日々から目標を持った日々が変わって行った。

人生突っ走ってなんぼ

ギターを買ってもらって一か月一曲だけを重点的に練習し続けて、

ONE OK ROCKの未成交響曲の練習していた。むっちゃムズイんだけどやっぱりプロはすごい。

部屋の一角にあるベットのの上には掛布団が変なオブジェクトになっていた。

その中にはもちろん俺がいる。

「そろそろ姉さんがかえって来るな。」

カランコロンとドアが開いた音がする。

「ただいまー」

元気な女の子の音がする。

「まさに言ったそばからっつと」

いつも通りに急いでギターをしまつて、椅子に座る。

音楽プレイヤーを起動させて、音楽を聴く。

もちろん聞くのはワンオクだ。

音量を大きくする。自然にリズムに合わせてノリノリになる。

「純？いるのー」

この時俺は姉さんがドアを開けるとは思ってもなかった。

サビに入ったところでドアが開き、姉さんは俺のノリノリな、音楽鑑賞を目のあたりにする。

「純？」

そこで俺が姉さんの存在に気づき、音楽の再生をやめ、ヘッドホンを外す。

「どこから見た？」

「動きがおっとりしてたところから、」

顔が赤くなる。すごく

「つまりは最初からやん」

「うん、ごめん」

「まあいいや」

気持ちを切り替える。自慰行為を見られるよりはマシだ。

「それで？用事があつてきたんでしょ？」

「ああそうだった！純これから暇？」

「暇だけど？」

ギターを弾く以外、と心の中で呟く

「ならよかった！よかったらなんだけど、一緒にお向かさん家の羽沢珈琲店に行こうか
なつて。」

一緒にカフェ？・・・まあ息抜きにはなるし断る理由などなかった

「別にいいよ。そうと決まったら早く行こうよ」

「うん！」

ん？原作だと羽沢つぐみと山吹沙綾って関わりあるんかな？

てか、絶対俺にはないだろ・・・。

「大丈夫かな。」

「ん？なんで？」

声に出ていた、この癖やばいな、直そう（決意）

そんなこんなですぐに羽沢珈琲店についた、まあななめ前ですし。

ドアを開けて入ってみる。すると姉さんより少し背の低い女の子が近くまで来た。

「い、いらつしやいませ！カウンター席でよろしいですか？」

「はい、カウンターでお願いします。」

俺はその女の子に告げる。

「かしこまりました。こちらへどうぞ。」

案内された所に腰を掛ける。

「ご注文はいかがしますか？」

「期間限定。パンケーキを2つお願いします！」

姉さんが勝手に注文してしまう。

「あと、ホットコーヒー二つ。」

姉さん、ここは珈琲店なんだからコーヒーくらい頼もうね。

「かしこまりました。少々お待ちください。」

「ねえねえ今の子可愛かったね。」

「なっ」

「あ、赤くなった」

姉さんは笑いながらこっちを見る。

「うるさいな」

そっぽを向く、早くコーヒーできないかな

「お待たせいたしましたこちらコーヒーと期間限定。パンケーキでございます」

「おおおこれがうわさに聞くパンケーキ」

「うわさ？」

「いやね、うちのクラスの女子がこのパンケーキが本当においしいって言っててさ」

「それで甘いものが好きだけど一人で行くのも気まずいので俺を呼んだと」

「まあ、そうだけど」

「そうだけど? どうしたの?」

「何でもない!」

姉さんは少し顔を赤くしながらパンケーキを胞ばる、? まったくわからん

沙綾 side in

あの時から何故か純が別人に見える。

別に性格がガラツと変わったわけじゃないはずなのに。

原因はなんとなくわかる。

あのお店の強盗事件の時に全きに感じた感情は

恐怖

ただそれだけだった。そのあとには純が犯人を殺してくれた。

ただ、そのとき思ったのがこの子は本当に家族なのか。

という疑問だった、あの時の純の目は明らかに家族を見る目じゃなかった。

元々純は純じゃないのかもしれない。

あなたは誰なの？

でも正直誰でもいいきつとそんな不思議も純の一部でしかないのだから。

――――
純 s i d e i n

時間が過ぎてゆく感覚。

時間を浪費した感覚。

ここ二年間ギターの練習と家の手伝い、そして学校。その繰り返し

「はあ、畜生、インターネットしたい」

親に頼んでも『小学生には早すぎる』といわれた。

「中身は四十後半だつーの」

そんなことを嘆きながら椅子で回転する。

はあ暇だし今日もギター弾こう。

まずは、東方 project のアレンジ曲の bad apple のロックアレンジだ。
そこからワンオク曲を数曲。

ボカロのロスタイムメモリー

いつものセトリ。

モット

モット

もつともつと脳をふるわせたい。

タトエバ？

アノトキノヨウニカ？

「いいや、違うね」

はつきり否定する。

最近また中二病が発症した。マジでバカじゃないの。

「こんな変な妄想。」

そうだこんな声ふつう聞こえない。

「散歩に行こう」

「出かけるのか、純」

「うん少し気分転換。」

「5:00には帰れよー」

「はい」

さて、外に出たんだが何をしようかな。

普通の小学四年生は休日だと友達と遊ぶだろうけど俺は生憎普通な小学生でもない
ので、

「一人で何してんのアンタ」

「そちたこそ」

そこには意外な人物『佐々木 美紅』がいた。

「相変わらず赤毛のポニテがにあうねえ」

「なっからかうな!」

「ははっ顔真っ赤だぞ!」

「罰としてなんかおごれ」

「はいはい、わかりましたよお姫様。」

「なっ誰がお姫様だつて!?!」

今日こそほんとに暇だ。

楽しかった小学校生活も相変わらずの日々を過ごし、気が付いたら

小学校を卒業していた。

ココロヲユラスモノ

『出会いは突然』なんて言葉があるが、それは2次元または他人が描いた絵空事に過ぎないと、俺はそう考えていた。だが、よく考えてみると、通り魔に会ったり、変な強盗に会ったりと案外納得できる言葉だなあとしみじみするこの4月、店の様子を見て俺の相棒、

『エクस्पローラー』をギターバックに入れ、店を出る。向かう先はもちろんライブハウス。中学生になって活動範囲が広まり、ライブハウスcircleによく行くようになり、もう常連となった

「よつす」

「おはよう」

いつもどおり軽い挨拶を赤髪の娘と交わす。

「今日もライブハウス行くの？」

「うんもちろん」

「家は？大丈夫なの？」

「まあ姉さんいるし……。」

「あんたねえもう少しギター控えて家にいたら？」

「家だとバレる可能性が……。」

「だから、家でギターを弾けなんて言っていないでしょ？家で大人しくしてなさいよ」

「それは絶対に無理」

「ええ」

美紅が困惑したように引くひどおい

「まあ俺のことなんかどうでもいいじゃんそれよりなんで美紅がうちのすぐ近くの電柱に隠れてるわけ？」

「!?いいいや親にパン頼まれたけどほら、友達が営んでる店だとはいりにくいじゃない？」

「別に営んでるわけじゃないんだが」

「もういいわよ！じゃあね！」

「あ、ああ」

なんだあいつ、まあいいやcircle行こ

「お、純君今日もきたねー」

「こんにちはまりなさん」

「今日も練習？スタジオ空いてるよ！」

「ありがとうございます！」

スタジオに入り、ギターのチューニングを済ましエフェクターの電源を入れアンプに繋ぎ、準備はできた。さあ今日もかき鳴らすぜ！

退出時間になり片付けを済ましてスタジオをあとにする。

「そうだ純君」

まりなさんに声をかけられる。なんだろ

「もし良かったらなんだけど純君さ」

「ライブに出てみない？」

まさかの出演オファーが来た。

「え、俺なんか出てあんな上手くないですよ!？」

「いや、とりあえずバンドとバンドの間の空き時間を潰す感じのサポート的なやつでいいから出て欲しいんだよね！お願い！この通り！」

「そんな感じでよければ出ますけど…。」

まあ断る理由もないし。

「ライブ、かあ」

深夜のベッドの上で嘆く、今までもライブとか、みんなの前で何かを発表などするのはあまり慣れてはない、生前ではプレゼンで手一杯だったのに。

「はあ…。どうしよう」

断る理由がないからと言ってつい『yes』

と言ってしまったのだ。

「なんであんなこと言っちゃったんだよお」

外に行こう。うん、そうしよう

店をこっそり出て、夜の街に繰り出す。

昼とは違うまたいい雰囲気だ。

「公園でいいか」

自販機でコーヒーを購入する

それにしても今までを振り返ると思い出す。

あの事件を初めて人を殺めてしまったあの事件、本当ににあってよかつたのかなまだ俺に何か出来たきがある。何も殺さなくてもよかつたんじゃないかと思った。

「それでも姉さんは救えた。」

その事実があればいい。

不意にそう思ってしまう自分は多分層なんだろうと思う。

冷えたコーヒーを飲み干し、店に向かう。

ゆっくり、ゆっくりその一本を踏みしめ、

「俺は生きている」

ただ、その当たり前を実感しながら歩く。

明日まりなさんに話を聞きに行こう。

ライブで最高のパフォーマンスをしてみせる！

そんな決意をしながら歩く俺を見つめる影には気づかなかつた。

???
side in

「あいつは……。」

見たことがある、どこだっけ？

自分の記憶を探る。

「うーん……。あ！思い出した！」

あのライブハウスにいたギタリストだ！

あの子がライブするの少し楽しみだな！

私は少しスキップ気味に家に向かう。

その豚骨醤油ラーメンの香りを出しながら。

「あの事件ってなんだろう？」

「つてことが昨日あつてさ」

私はいつもの幼なじみに昨日の夜中に会った出来事をみんなに話した。

「そんな事があつたんだ。でもそんな夜中に出歩いちやダメだよ？」

栗毛の子が言う、この子は羽沢つくみ

A f t e r g l o w 1 番の努力家だ。

「ははっごめんごめんどうしても豚骨醤油ラーメンが食べたくなって」

私は笑いながら誤魔化する。

「ダメだよ！20：00位から副交感神経が働いていつもより栄養の吸収量が多いんだ

から!!」

「お、おう」

ピンクの髪の毛の子が言う。

この子は上原ひまり最近太ったと言っていたが……。

「ひーちゃん、そんな事言ってるけど実際に食欲に勝てるのー?」

「うぐ、そ、それは……。」

銀髪の子がツツコミを入れる。

この子は青葉モカ漫画好きで何かと不思議さんな子

「みんな今日練習来れる?」

綺麗な黒髪に一筋の赤メツシユが入った子が言う。

この子は美竹蘭友達思いが1番のすごい子だ!

私たちはA f t e r g l o w というバンドを組んで、いつも練習していた。

「行けるよー」

「うん、今日は生徒会もないし」

「私も!」

「私も行けるぜ」

私たちはcircleに向かった。しかしそこで見たものは

ギターを楽しそうに全力で引く少年だった

ココロヲユラスモノ後編

「今日はイベントに来てくれてありがとうー!」

出番があと少しで来る! 確か次は、G l i t t r * G r e e n という俺も知っている、有名アマチュアバンドだ。

正直こんな猛者の後、自分のギターソロだと思うと、物凄く緊張してきた。そんなときはお客さんを野菜だと思えと

生前の時、初めての会社でプレゼンを頼まれたときに、先輩が似たようなことを言っていたのでそれを思い出しながら、頑張ることに

する。あーもう! どうすればいいんだよ! とにかく何か弾いて、時間をつなぐしかない! グリグリが終わるまでに、覚悟を決めなくては。

つてもう終わり!?

「お次は、このライブハウスの常連中学生ギタリスト君のギターソロだよー!」

「お楽しみにー!」

グリグリの人が言うとお客席はさらに盛り上がるおいおい何してくれてんだよ! ハードルさらに上げるなバカあ泣きそうになるが、とにかくもうやるしかない!

俺の出番になったところで会場が暗くなる、俺はすかさずステージの上に行き、エフェクターを繋いで、アンプにつないで、準備を完了する、

最初にやるのは『the AVENGERS』だアベンジャーズのメインテーマで最初は控えめなものの最後の方には大盛り上がりの曲だ。

「音撃斬 雷電激震!!」

俺はそう叫ぶと背後から雷のSEが入る、そして、すかさずギターソロを始める。周りなんて見ない、ただ自分の中を最高潮を出すだけ、気が付けば雷電激震が終わる。

もし盛り下げたらどうしよう

不安だ

だが

そんな不安は大量の歓声によってかき消された

「よっしゃあ！次のBandだあああああああ」

「今日はライブありがとね！」

「いえ、こちらこそいい経験をしました。」

「ほんと!? それならよかったー!」

俺はまりなさんにお礼を言い、やりきった顔で店に向かう

たぶん今は最高にドヤ顔しているだろうな。

「ただいまー」

とりあえずばれたらまずいので裏口からこっそり家に入る自分の部屋に入り、ギターを隠すようにしよう。

「よしっ」と

このままだと今日働いてない

このままだと怪しまれるのでなんとかせねばならないのだ

俺は店を手伝おうと、ドアを開ける、そしたら小さい女の子が立っていた。

「おにいいいっ帰ってきたの?」

「ついさっき」

この子は山吹 紗南俺の妹だ、まだ六歳だ。

「じゃあ俺はお店手伝ってくるから」

「いつてらっしやーい」

俺は適当に返事をして、店に向かう。

今日はほんとに楽しかったな。

またやってみよう

俺の心を震わせるものを

沙綾 side in

中学生になってからバンドを組んだ、大切な友達と

お店のほうは少し放置気味にはなるのだけど、それでも音楽がしたかった
少しわがままな自分がいた。

「あと少して初ライブだね！」

「うん！」

「みんなで頑張ったかいがあったね!!」

「よーしこのままがつつり練習するぞー！」

「ところで沙綾はお店のほう大丈夫なの？」

私は痛いところをメンバーにつかれる、確かに最近、お店を放置しすぎているかもしれない。でも……。

「私には頼りになる弟がいるから！」

そう、純が一人いれば家なんぞ問題ではないのだ。

それにしても前から持っている疑問

純は何者？

確かにあの子はほんとに頼りになる、それは男の子だからとか、決してそんなものではない

もっと別の別人のような安心感があるのが純なのだ。
まずい、このままだと

純を家族ではなく、異性とみてしまう。

巴 side in

私たちは、いつもどおりの練習のため、ライブハウス circle に来た

「ねえねえ、今日ライブイベントやってるんだって！みにつてみようよ！」

「おーモカちゃんに興味ありますねえ」

「たしか、いつも一人で練習しているあの子が出るみたいだぜ？」

「蘭ちゃん、どうしようか」

「見に行ってみよう」

遂にあの子の出番になった。最初は、あこと一緒に見たシリーズ物の映画のメインテーマから始まって、

なんかわからない単語を叫んだと思っただけなら急に雷のサウンドが鳴り響く、当然つぐは
びじるが

そのあとのギターソロですべてが吹き飛んだ感覚がした。気が付いたら彼の演奏は
終わっていた

盛大な歓声を送り、私たちはライブイベントを全力で楽しんでいた。

「あの子すごかったね！」

「あのギターソロはかなりの熟練度だったね！」

「私おなかすいたあ」

「モカちゃんも」

「じゃあ沙綾のどこ行くか！」

「行こう！蘭ちゃん」

「うん」

山吹ベーカーリーに向かっていつもどりの私たちは歩き出した。

純side in

「ほら、お母さんしつかり休んで」

「うん、ごめんね・・・。」

「こつちこそ、勝手に出歩いちゃってごめん」

「あとは俺がやっておくからお母さんはしつかり休んでおいて」

「うん、わかった」

俺は、階段を上がるお母さんを見守り、すぐに仕事に取り掛かる。

この時間帯だと、仕事終わりのひと、部活終わりの人が良く来る時間で、

それなりに混む、その状況で三女を産み、体が弱ってしまったお母さんに無理をさせ

るわけにはいかない。

「いらつしやいませー」

さてそろそろラッシュユがくるぞ

「こちら500円になります」

「ちようどお預かりします。」

「ありがとうございます」

一連の流れをこなす、何年も続けていたらしい加減慣れてくる

閉店まであと少し、もう少し頑張るかど気合を入れなおす。

「いらつしやいませー」

「モカはほんとここのパン好きだよなー」

「いやいやーここのパンが本当においしんですよー」

「それにしても、つぐのおうちの近くのパン屋さんほんとおいしいよねー」

「じゃあ私はこれにする」

「おー蘭はメロンパンを選ぶとはなかなかいいセンスをおもちでー」

女子中学生5人組が入ってきた、たしかcircleで見たことがある、after

g i o w ってバンドだった気がする

「さっきのギターソロすごかつこよかつたよな!!」

?!いま・・・なんていった!?

「すいませーん会計お願いまーす」

「あつはいたいへんお待たせいたしました」

銀髪の子が大量にパンが積まれたお盆をレジに持ってくる。いつもの量だからいつも通りにさばいてゆく

「たいへんお待たせいたしました。合計で2340円です。」

「ポイントでー」

「かしこまりました。こちら、ポイントで全額払いでお間違いないですか?」

「はーい」

ばれてない、ばれてない、

はずだ

「あー!この子ださっきのギタリスト!!」

?!?!ばれてんじゃん、おわった、何十年間も守ってきたのに!!

「えー?純君が?そんなことないでしょ?・・・。」

「そうだよね!つぐ姉!」

なんかつぐ姉がこっちをすごく見てくるんだけど……。

「やっぱり！ そうだよ！ さっきライブしてたでしょ！」

どうしようばれちゃった☆

「あの一このことは家族には絶対内緒でおねがい！」

「どうして？」

「驚かせたいからじゃだめ？」

「んーなんで？」

「そ、それは」

まずい、実は転生してこの子になって、二度目の人生謳歌してますなんて

口が裂けても言えない。そもそも前世の記憶をもって生まれる子はそう珍しくないのだが、

それは、5〜6歳の間に記憶は消えてしまうため詳しく研究できないのだ。

そんな状況で前世の記憶を持った中学生がいますなんて、言ったら研究施設行き確定なんだから。

「まだ、そのときじゃない。」

「どういうことだ？」

赤髪の子が問う。

もうこう言うしかない。

「まだ、そのときじゃない。姉さんが別のBandに行ったその時がベストなんだ。」

事情を説明しまくるのは疲れる・・・。

「姉さんが別のBandに行つてからがベストなんだ」

「どういふことだよ。それ」

俺は今言える最大限のことを一言で言った。それ以上言えばさらに怪しまれる。

「なんでそんなこと言うの？純君」

つぐ姉が言う。

「いま、お母さんの容体があんまりよくなって、近いうちに倒れる可能性が高い。」

俺は真実を話す。

「さらに、いま姉さんはいま初めて自分に正直になつていゝるんだ。」

「皮肉なものだよな。人が素直になつた瞬間にそれをぶち壊しに来る」

「まあお母さんが言うには、姉さんには内緒でつてお母さんに言われたんだ」

『あの子はいま、全力で自分の欲望に素直になつていゝるのに親がこんな事になつたらまた氣を使つて自分をふさぎ込んでしまふ』

「と言つていた。そのため、俺たちはこのことを姉さんには内緒にしているんだ」

「でも」

俺は続ける。

「それでもいま、お母さんは限界に近い、いくら俺や父さんがいてもお母さんは働いてしまおう」

「だからさつきも言った通り、お母さんは倒れてしまいかもしれないんだ。」

「倒れてしまつては、姉さんが自分をふさぎ込み、しばらく自分に素直にならないで、ふさぎ込んでしまおう」

「でも大丈夫、絶対また自分に素直になれるような環境に築きあげるための、絶好なチャンスがこの先あるんだ」

「その時のためにばれるのは避けたい」

「わかってくれた？」

ずいぶんと長々と話してしまった。みんな聞いてたのだろうか？と思つてたら、ピンの髪の子、上原さんが涙ぐみながら話を聞いてくれた。

「そんな事情があつたのか」

「ごめんねこんなこと聞いちゃつて」

つぐ姉が謝ってくる。俺はもちろん

「謝らないで、黙つてた俺も悪いし」

「なんか力になるから無理しちやダメだよ！」

「うん、大丈夫ありがとう」

「じゃあまた今度な」

「また買いに来ます」

「ばいばい」

「それじゃ」

「またコーヒー飲みに来てね！」

「うん絶対に行くよ」

さてと、店を閉店させて今日の営業を終わらせる。

それにしても姉さんの初ライブが近づくに連れて、お母さんの容体は悪化していくばかりである。

「こりゃ、しばらくギターやめるか」

俺はしばらくは店に専念する事を決意した。

美紅 side in

私のお父さんは殺人鬼だった。自分の性癖に合う人間を殺し、完璧に証拠を隠滅するかなりの重罪人である。

私が小さいころに同じ年の子に殺されたと警察の人は言う。もしほんとであるなら

合つてみたいものだ。

だけど、その感情はいつしか薄れ、今は普通の生活を謳歌している。

そんなことを考えていると、彼を見つめる。私が見てきた中で一番可愛いと思える子
山吹純、この子は私の何かを呼び覚ますような気がする。

この子のことを考えるとなんだか顔が熱くなつて胸が苦しくなつてきて、でも悪い気
はしなくて、

もつともつと彼のことを知りたくなつていた。おそらくなんなはこれを聞いたら

『恋』

とか言うんだろうな。

「よっす」

私はいつも通りにあいさつする。

「おっす」

彼もいつも通りに返す。相変わらずいい声を出す子だなあ

「ねえねえ次のライブいつなのよ」

「え、前回のライブ来てないの？」

「日時教えられなきやいけるわけないじゃない」

「教えてなかったか、ごめん」

「まったく見たかったのになあ」

「よかつたらライブ映像あるからいる？」

「え、いいの！」

「いいよ別にみられて困るものないし。」

「やった☆」

彼の映像が手に入るとかこれ以上にうれしいことはあるのだろうか。

絶対にはず。

「しばらくはライブもしないしギターも控える」

今、なんて？ 『かつこいいギター弾くんだぜー』 っていうのも可愛く言ってたのに。

「どうかしたの？」

「ああ実はさ……。」

彼からすべて聞いた。彼の母親のこと沙綾さんのことそのためにお店のほうに専念すること。

よく考えれば接するチャンスが増えるかもしれない。そう考えたらライブよりもうれしいの事なのかも。

「そうなんだ。まあアンタにはいい判断じゃない」

「そりやどうも」

「ああこの子はほんとに可愛い家族のためにこんなに一生懸命で、なんて家族愛にあふれた思いやりのある子なんだって

彼のことの一つでもしれれば今日はもう満足だ。

「あたしも何か楽器やろうかな?」

「いいんじゃない?」

「どんなのがいいと思う?」

「やっぱりきれいな赤髪だしベースとか、キーボードとか」

「んーベースいいかも」

「ほんと!?今度見に行こうぜ!」

「うん、いいよ」

「これってデートなんだよね!」

「何か顔赤いけどどうした?ねつか?」

「え!?!いや、別に!?!何でもないし!!」

やばいなんかこの子といると顔がどんどん熱くなっていく。

もう好きすぎるっ

今日の授業はいつにも増して集中できなかつた。

亀裂

あのライブの日から一週間、今日は姉さんが所属するバンドの、初ライブの前日だったのだが、なんと

母が倒れた。

原作通りの展開だった。バンドリは結構明るいイメージはあるが、氷川姉妹や、今回のような山吹家の事件など結構、修羅場がある。

みんなは思うだろう、こんな事起こすなよ。わかってるならなんで阻止しなかったんだ。とこれは現実、自分の感情で未来を変えちゃいけない。

変わってしまったところはあるが、神様はそんなことは望まず、物語の重要な分岐点はしつかり原作通り進むらしい。

俺から言えるのはただ一つ。

知ったこつちやねえ

この一言にすぎる。

だが、この世界の母親が倒れてしまうなど、心配しないわけがない。周りの評価がどうあれ、このまま終わらせることはしない。

むしろここから成り上がって、これからの生活を万全にして見せる。そのためには沙綾、父さん、俺、そして紗南が協力し合わなければこれは達成できないであろう。

沙綾はこれからが幸せなのだから。そんな神様の気まぐれなんぞに負けてたまるか。

俺は母さんの病室前で決意を誓うため、聞こえてないと思うが、一応ノックしてはいる。
.
.
.
.
.

私はその言葉で怒り感じた。なぜお母さんを苦しめたこのお店をまだやるなんて、もう店は閉めたほうがいいはずだ。

「なんで!？」

「どうしてお店を続けるの!？」

「どうしてつてパン屋だからだろ?」

「そうじゃなくて!なんでお母さんが倒れてまでもこんなお店を続けるの!？」

「もうお店閉めようよ!絶対そのほうがいいよ!」

「ふざけるな!!」

「!!」

「姉さんは何も知らない。どうしてお父さんお母さんがパン屋をやろうとしたきっかけを。」

「そ、それは二人の夢だからでしょ何回も聞いたよ!!」

「ならなぜ気づかない!!このパン屋が二人の夢ならお母さんがいない間に閉めるなんて残酷なことをするつもりか!？」

「絶対にここは繋いでみせる万全な状態まで成り上がってみせる!!」

私は純の本気の顔を見る、その顔は決意と少しだけの後悔を混ぜたような顔をしていった。

「ここで私は思った。『私なんて自分に素直になっちゃいけない人間なんだと』
それならいつそ自分を封じてしまえば、みんな幸せだ。」

「わかった」

私は納得したと同時に、純は本気で私たち家族を大切に思ってくれてる。別人なんかじゃない、私の大切に、頼りになる、たった一人の弟だ。

――――
純 side in

あれから数日がたった。あれから姉さんは、バンドをやめ、家の手伝いに専念するこ
とに。

お母さんが店を閉じる事の次に恐れた事態になってしまった。だが、ピンチはチャン
スとも言おう。

「ここからだ、運命は」

「おーい純レジを頼む」

「わかったよ」

俺は工房から店に出る、いつも通りレジを打ち、お客さんを送り出す。

ラッシュが止み、父さんに声をかけられる。

「ギターはもうしないのか？」

「なわけない一週間に一度は触ってる。」

「そうか、でも明らかに触る回数減ってるだろ」

「当たり前だよ家がこんな風になってるのを見ないふりして自分のことに没頭するなんて」

「そうか」

お父さんは少し寂しそうにそして悔しそうに言った

そして、すぐに言った。

「お母さんがなこう言ってたんだ。」

『純は年齢の割には大人だけどしつかり子供な部分もある。だから完全に大人になる前に自分の人生を楽しんでほしい』

「とな、だからな純……。」

「うん、ごめんなさい」

「謝るなよなほんと」

本当にこの人はいい父親だ、俺は前回の人生ではこんな子育てに情熱的な人たちは中々いないだろう。

前回の人生の時は親はこんなやさしくなかった。こんなに贅沢なんてできなかった。こんなに生きがいにはならなかった。

「ありがとう、ほんとに」

「ははっ泣くことかよこんな事は親の役目つてもんだ」

「え？」

気が付いたら涙がこぼれていた、俺は顔を必死にぬぐう

「あ、あれなんで」

「今日はもう上がれ。疲れたる」

「うん、ありがとう」

俺は流れる涙をそのままに、部屋に入る。

俺はそのまま寝てしまった。

――――
沙綾 side in

父さんと純の会話を聞いた。お母さんとお父さんはほんとにやさしい人だ。

私は、今まで、お店を優先に考えてきたけど、妹が生まれてから、バンドに入って、自分に素直になった途端にこれだ。

なら、私はこれからもこの家に体を捧げなければならいのかと。自分の中でか勝手に結論づけた。

「純……。」

私の命を救い、今度は家族の危機まで救おうとする私のヒーロー。私の前で初めて涙を流した、

そんな彼が今、私の目の前で眠っている。

「助けて、助けてよ純」

私は静かに部屋から出る。

再開

あの母さんの事件から早、二年の月日が経過した。

沙綾は偽りの明るさを取り戻し、母さんは日常生活に復帰した。

「いったいどうすれば……。」

精神年齢が60を超すところまで来ている大人でもこの大きな問題を抱えるにはあまりにも大きかったのだと、実感する。

あの父さんと話した日から、姉さんは『バンド』というワードは、姉さんのNGワードになってしまった。

そのワードを出した途端一瞬だけ暗くなり、笑ってごまかす。それが二年も続いてしまったのだ。

流石に責任を感じる。だが、山吹沙綾と言う人間は戸山香澄によって救われる。それでも、こんな状況を家族全員で見守る。と言う方がつらい。

できる事なら、友からでなく家族で救ってあげたい、家族全員がそう思った。全員で意識をすればこんな状況にもならなかったのに、と。

だが、もうタイムリミットだ。この日は高校の入学式、つまりバンドリ！が始まる日

である。

ここまで異例な事件があったが、なんだかんだいあつてここまで山吹沙綾の過去はそこまで変わらなかった、いや、変えれなかったといった方が正しい。

もうここまで来たら最後の切り札として戸山香澄に後を託すしかない。

「はあ、やつぱり、この世界は……。」

最後まで言おうとしたのだがやはりやめた、こんなできた話でも現実で起きかねないのだから。

――
姉さんが入学してから一週間、姉さんはさつそく戸山香澄と関わり、家まで来るようになった。

家に来た香澄さんは背中にギターを背負っていた。

「じゅんじゅん、今日も来たよーっ！」

「いらつしやいませ。香澄さん」

「固いなーじゅんじゅん」

「店番中ですので、それに年上ですから。」

嫌、実は超年上である。

「むー」

「それよりも、キラキラドキドキする部活は見つかったのですか。」

「それがね！それがね！私、バンドがしたい！」

「バンド！いいですね！」

「でしょー！」

そう、じやなきや始まらないのだ。戸山香澄と言う人間が、バンドに魅力を感じ、さまざまな苦難を仲間たちとともに乗り越え、時に笑い、時に悲しみ、時にぶつかり、その都度元の関係より絆が深まっていく

素晴らしいストーリーなのである。

「じゃあカレーパンと、メロンパンと、チョココロネ！」

「合計で530円です。」

「はーい、ちょうどで！」

「530円ちょうどお預かりいたします。レシートです。」

「ありがとうー！じゅんじゅん！」

「ええ、また今度」

香澄さんが店内から出る。その元気あふれる背中をやさしく見守りながら。

「姉さんをお願いします。」

小さい声でつぶやいたこの言葉は俺の諦めと、新しいスタートラインに立った合図

だ
っ
た。

悩み、打ち明けし時

今日も学校に行く前に店を手伝う。早朝にパンを買いにくるお客様もいるのでその対応などだ。

「ありがとうございます！」

いつもの様に対応していく。

「ふういつもなら、来るはずなのだが。」

お、来た来た牛込さん。いつもチョコココロネを買ってくれる常連さんだ。

原作では香澄との関わりを少し拒絶していたが、あのキラキラ星のステージでバンドをすることを決意する。

りみを思い出すと、ちょうどよくりみが入店する。

「いらつしやいませー！」

「あー今日は純君なんだね！チョコココロネまだある!？」

「まだあるよ。落ち着こうか」

本当にこの子チョコココロネのことになると熱くなってるな。すごい顔してしてたぞ。

これが噂の『ぶっココロネ』ってやつか（違います）

「じゃあ今日は二つ〜」

いい笑顔でこちらに向かってくる。

「じゃあチョココロネお二つで300円になります。」

「はい、300円」

「ちょうどお預かりいたします。こちらレシートです。」

「ありがとうございます、そろそろ姉さんも降りてこないとまずいんじゃない？」

「そうですね、ありがとうございます。」

「じゃあ、またね！純君！」

「はい、お気を付けて行ってらっしゃいませ。」

さてと、姉さんを起こしてこなきゃ。

いつも道理に学校に向かう。

「おはようー！」

「おう、おはよう」

いつも道理な挨拶。俺の幼馴染、美紅が駆け寄ってくる。

「姉さんの様子はどう？」

「いまだに……。まあでも、いい傾向では、あると思う」

「そうなんだ。安心した。純がいいっていうならいいんじゃない」

「そうか？」

「うん、どんな時でも純に言えば、しつくりする答えが返ってくる」

「そうなんだ」

昔聞いたことがあるが、このくらいの年くらいになると大人な男子が、好みらしい。

精神年齢60歳の俺は、当然ほかの女の子には、比較的に声をかけられることが多いのだが、結構無視している。

「ねえ、純？」

「なんだ？」

「そろそろライブしようよ！小学校の頃やってから全然やってないじゃん」

「今は受験生だから、また今度な。」

「むー」

「安心しろ絶対またやるからさ」

「そっか、今の時期不自然に外出したら怪しまれるもんね」

「それもあ、が、理由はそれだけじゃない」

「それって？」

「姉さんが復活する一押し、もしくは、復活した後には明かしたいからな。」

「へーそうなんだ」

「まあ一週間に一回は触ってるから。腕はなまったりはしなないぜ」

「まあ期待しているよ」

「また練習、聞きに来てくれるか？」

「もちろん！」

「ねえ純今日の放課後、お店の手伝い？」

「そうだけど？どうした？」

「あの……。その手伝い、私にも手伝えないかな？」

「別にいいと思うが、今日家に来るか？」

俺は放課後になつたらなるべく家のお手伝いに、尽くす。

俺の家のことをほとんど知っている美紅から見たら、俺の働きを見て、心配しているのだろうか。

「うん、だって純、いつも手伝いばっかで……。その……。」

「うん、わかった、今日そのまま行くか？」

「行くー！」

美紅の顔が明るくなる。この子は中学生になって急に大人っぽくなってきて、いつきにクラスのマドンナとなった美紅は、男子からも評判だ。

とてつもなくかわいい。圧倒的に議力が溶けているが、んなもん気にしない。

「じゃあ行くか。」

「うんー！」

学校から移動し始める。今日もいつも道理、一緒に帰る。

もはや学校公認カップルみたいなものだ。

友人には何度も『付き合っていないのか』や『実は付き合ってる』なんといわれているが、こんなじじいと美少女が付き合うとか考えられない、いやマジで考えられない。

「ねえ私たちって……。」

「付き合っていないぞ」

「ちえー」

すこし夕焼けがかかった空に向かい、家に向かう。

沙綾 side

「ドラマ、たたきたいなあ」

無駄な希望を口に出してみる。そうすると誰かが助けてくれそう。

と、言うよりもしかししたらもう限界なのかもしれない。

香澄や市谷さんや牛込さんのように、わたしも・・・。

「そんなことはだめだ、ダメなんだ」

「何が駄目なの？」

「じ、純!? 寝てたんじゃないの!?!」

夜中の部屋に聞こえたのは、私の頼れる弟の純だった。

もしかしたら・・・。

「私が素直になると、誰かが不幸になる、なんか……。そんな気がしない?」

「そうかな? 絶対にそんなことないね。」

「どうして?」

「誰かが幸せになれば、誰かが苦しむなんてことが起きるのであれば、この世界中の人は今頃大変な騒ぎだと思うよ。確かに姉さんは音楽を楽しい、みんなとできて幸せになれたかもしれない。」

私の弟は語る。その言葉はよくある中学生のポエムではなく、今までの経験、それだけではない、長く培ってきた説得力があると感じた。

「だからさ。もし良かったらでいいんだけどね、もう一回ステイックを握って欲しいん

だ。」

「そんな事……。」

「どうするかなんて、誰かが決める事じゃあない。自分で決めると思うよ」

「それじゃあおやすみ」

私の、本当にしたいこと……。

『キラキラドキドキしたい!』

またステイックを握るなんて……。

番外編

山吹家の夏休み

「これでいいかな」

俺は水色をメインに黒のラインが入った、水着を手取る。

「お、純はそれにするのか、じゃあ俺はこれにしようかな」

そう言いながら父さんは俺と同じシリーズの色違いを手取る。

そのままレジへ行き会計を済ませた父さん、母さんたちとの集合時間はまだまだ先だ。

「これからどうするの？まだまだ時間あるよ。」

「ふっ我が息子よここはどこだ？」

「シヨツピングモール」

「そうここはシヨツピングモール遊びがつまるところだつまりこれから遊びに行くのだ。」

「え、え？」

「ふっ男同士水入らずで全力で遊ぼうぜ！」

俺は困惑しながら。父さんの瞳を見つめる。少年のようなキラキラしたような。

「ふっ俺はそんな父さんの息子なんだぜ？」

「さすが我が息子。わかっているじゃねえか」

父さんでも男としての童心があるのだ。

「父さんってさガン〇ムのプラモ作ったことある？」

「俺は、ファースト世代だぞ？」

「それなら、僕はSEEDにしようつと」

「期間は一週間でいいよな？」

父さんは僕に確認を取る。僕は「勿論」と返事をする。

「なら、早速ATM行かないとな。」

父さんはそう言うのと案内板を頼りにATMへ向かう。その間、俺は、プラモ屋に向かうことにした。まず手始めにストライクでも作ろうかな。

起動戦士ガンダムSEED、俺が始めて見たガンダム作品であり、かなり好きな部類のアニメだ。ネットでは主人公をクズ扱いする人が多い。でも俺が思うに、今まで民間人だった奴があんなに戦えるのはすごいはずだし。

その、主人公の力に頼らないと生きてはいけない、軍隊も軍隊だ。さらにあの、赤髪の女のせいであの名台詞が出てきたんだと、俺個人としては思うけどな。(独自解釈)そ

んなことを考えながらプラモを見ていると、いつのまにか父さんが後ろに立っていた。

「ふむ、ストライクか。」

「もちろん父さんはファーストガンダムでしょ」

「うーんそれだけじゃ物足りないらザクも買っちゃおうかな？」

なんだこの人急にすごいこと言い始めたぞ。

「そんな!!それじゃあもう軽いジオラマじゃないか!!ずるい!!!」

「はっはっはっは」

なんか急に笑い始めたな、こんなキャラだっけこの人。

そしてすぐに真顔になって。こう言った

「坊やだからさ」

むっっちゃドヤ顔で言うやんこの人。

続けて父さんは言う。

「認めたくないものだな。若さ故の過ちというものは」

これもドヤ顔で言う。

「まあいいや、早く買わないと姉さん達との集合時間になっちゃうよ?」

「お、もうそんな時間かじゃあ買いに行くか!!」

父さんと俺は、レジで会計を済まして集合場所まで向かうことにした。

番外編：山吹家の夏休み中編

俺と父さんが集合場所に着いた頃にはもう母さん達はもう待ちくたびれていたように姉さんが頬を膨らませている。

「お、おまたせ」

お父さんがタジタジしながらお母さん位話しかける。

「あなたってそんなに人を待たせる人だったかしら」

母さんの背後に黒いオーラが見える……。

「なーんて冗談よ」

母さんはそのオーラを引っ込め、今まで通りに話す。

「姉さん達は水着お揃いにしたの？」

俺たちは（めんどくさいから）水着を同じシリーズにしたのでそちらもそうかなあと思ったのである

「教えない。」

「え、なんで」

今までは結構正直に自分のこと話すのに今日はどこか違うような感じ。

俺の頭にハテナマークを3つくらい出していると、母さんが言う。

「まあまあ純、こう言うのは当日のまでのお楽しみよ」

「ふーん」

なら無理に聞き出すことでもないか。

「わかった。じゃあ海行くまではお互い内緒って事で」

「そうだね」

「いいと思うわそれ」

どうやらみんな納得してくれたようだ。

逆に納得しない人いるの？

「とりあえずさ、お腹すいたからご飯にしよう？」

「お、そうだな」

「私、今すごくジャンクな気分」

沙彩が言う。女の子でもそんな時があるのかと少し驚きながらも、ジャンクで

あの人を思い出すなあ。あの青髪のポテト好きの努力の天才。

「おーい純、そろそろ行くぞ？」

「わかった」

この後無茶苦茶ポテト食べた。

水着を買って一週間が経過した。そしてこの日は父さんとのガンブラ披露の日である。

「と、言うわけで俺が作ったファーストガンダムはこれ」

と父さんが先に出した。

ならばと言う勢いで、ストライクを出す。

「こちらはストライクガンダム」

このストライクガンダムは、ほぼ素組みではあるが、しっかりと墨入れつや消しを拭いていてかなり完成度が高いはずだ。

「す、すごい」

父さんも圧巻している。

「ここはどうあったんだ？父さんの時とは全然違う……。」

父さんが興味津々にストライクをじっくり見ている。

「ここは、軽くマッキーペンを入れて、さらにシールの貼り方にも少しこだわってみただ。」

「なるほどお。純、今度は一緒に作ってみるか！」

「うん！」

なんだか心が温まったような気がする。

少なくとも前回の人生では感じたことのない感覚だった。

「このガンプラは、店のレジに飾っておきたいんだけど、いい？」

「もちろんいいぞ！」

「やった！」

「ふふ、なんんだか楽しそうね」

「母さん、みてくれよこのプラモ」

「プラモもいいけどちゃんとお店の仕事してくださいね？」

また背後から殺気が放たれていて、今日の閉店時間まで、ノンストップで働いた。

山吹家の夏休み後編

父さんとのガンプラ勝負から一週間今日は海に行く。

朝から早起きをして、電車を乗り継ぎ、そしてカンカンに晴れた、雲一つ無い空、そして

「うみだああああ」

「つて父さんが言うんだ、それ」

「ふふっ」

「ねえ純凄いね海だよ海」

「ああすごいなこれ」

さすがの姉さんも大はしやぎだ。確か原作では、RoseliaとPoppin, partyもこれから行くことになる海だったはず、確か曲名は「8月のif」だったわけ。

「じゃあ男どもはテントやら何やら立ててくるから、母さん達は着替えてきてもいいぞ」

「わかった頼むわ」

「じゃあまた後でね、純」

「うん」

「じゃあ早速準備するぞ」

「了解」

俺は、パラソルを立て、レジャーシートを広げて駅の中のコンビニで買った氷と水道水をクーラーボックスの中に入れ、ジュースやスポーツドリンク、さらに父さんのビール、お母さんの酎ハイやらも入れておく。

「父さん、こっちは終わったよ。」

「お、ありがとうこっちも終わったぞ最近のワンタッチテントって便利だなあ」

じゃあみんなを待ちますか。

しばらくして、姉さん達が戻ってきた。

「っー！」

俺は顔が熱くなるのを感じた、なにかと全開の人生でも女性の水着を見るのは初めてだったりするクソザコである。

姉さんの格好は、白をベースにワンポイントにリボンがついて、少女のならではの可愛いものだった。

「どう？純？」

「とても似合ってる。まあ、その、可愛いと思うよ」

母さんの方はさすが大人と言わんばかりの格好である。ビキニで上から水着パーカーを羽織っており、可愛いというより美しいと言ったところ。

そこからは軽く準備運動をしてから、海で泳いだり、スイカ割りをして、男女対抗ビーチバレーをしたりなど、かなり楽しんだ。

「やつぱり海来たらラーメンだろ」

父さんと言ったことがまさかのただかぶり、さらに親子の絆が深まった気がした瞬間だった。

「やつぱりうまいなあこれ」

父さんが言ったと通りこのラーメンは特別な工夫もされてない何も変哲もないラーメンなのにかなりうまい海の魔法というのは本当にあるんだなあと実感できた。

「あら、カレーも美味しいのに」

「あははっ」

この後みんなでかき氷を食べた。

お昼を食べてからはスポーツのターンだった。

俺と父さんはサーフボードをレンタルして、サーフィンを楽しんだ。

昔からバランス感覚がいいのかコツを掴んだ瞬間、うまく行った。

水しぶきが、またいい景色となりとてえもい経験だった。

しばらく遊んで、気がつけばもう空は朱色に変わっていた。

「おい純そろそろかたずけて帰るぞー」

「了解、じゃあ出したものかたずけるね」

「母さん達は着替えてきていいよ。」

「じゃあお言葉に甘えて。」

「またね、純」

「うん」

クーラーボックスの中身を全部流して、タオルで拭き、みずぎやbタオルを入れる、レジャーシートをたたみ、その他小道具もテキパキと畳んで行く。

「おお小学校5年生とは見えない早さだな、相変わらず。」

「ま、まあね」

「じゃあ後は母さん達を待つだけだね。」

「おう」

改めて海岸を見る…綺麗な夕日だった。俺は持ってきたカメラで一枚写真を撮った。そのタイミングで母さん達もどつてきた。

「お待たせー。」

「お、じゃあさっさと撤収しますか。」

俺が帰ろうとしたら姉さんが話しかけてきた。

「ねえ、純。私ね、中学校になったらね。」

姉さんは一呼吸置いて言った。

「バンド組みたいんだ。」

「！そっか…。」

あれから一年経った。妹は生まれ、姉さんはバンドを組んだ。だが…。

「母さん!!」

「父さん！今すぐ救急車！早く!!」

母さんが倒れた

番外編：純くんのソロライブ

ある日の朝

俺は眠りから覚めた、今日はいよいよ待ちに待った俺のソロライブの日だ！

朝食を食べ、顔を洗い髪を整え

愛用のエクस्पローラーをギターケースに入れて、ギターケースを背負った。

「よし、行くか！」

「おっついよいよか、純」

「あつ父さん」

「悪いな、今日は店の方が大変で離れられなくて」

「いいよ父さん気にしないで、それじゃあ行つてきます」

「おう！気をつけてな」

俺は家を出て、ライブハウスcircleに向かった。

「（今日のソロライブでやるセットリストは・・・）」

俺は行く道中にソロライブでやる曲を脳内でシミュレーションしていた。

そうやっている間にライブハウスcircleに着いた。

「まりなさん、こんにちは」

俺はcircleのスタッフのまりなさんに挨拶をした。

「やあ純くん、今日はよろしくね」

「はい、よろしくお願ひします!」

俺はまりなさんに向かい一礼した。

まりなさんに楽屋まで案内され、俺はそこに入り、いつでもライブが出来るように準備をした。

ギターケースからギターを取り出してチューナーで音を調整して、セツトリストを確認した。

「よし、大丈夫だ」

ガチャ

「純くん、時間だよ準備はいい?」

まりなさんから、時間だと声がかかった。

「はい、いつでも行けます!」

俺は自分のギターを持ってライブステージに向かった。

そしてステージに着いた。

ステージの隅から観客の様子をチラリと見た。

「思ってたより人いるなくこの人たちの前で俺はやるのか・・・」

緊張でいつでも心臓が破裂しそうだったけどそれ以上に楽しみの方が強かった。

「ヤッバーテンション上がったってきた。」

俺は覚悟を決めた。

「よし、いくぜ！」

俺はステージに立った。

そして観客に向かって挨拶をした。

「待たしたな！ここからは俺のステージだ!!」

凄く緊張はしているがステージに立ったらもうその緊張は吹っ飛んだ。

「じゃあ1曲目いくぜ！」

『Cosmic Magic Shooter』

最初の一曲目は東方のCosmic Magic Shooterのロックアレンジ

ジ版を演奏した。

まずはそれでライブを温めた。

観客のテンションも上がってきた。

「盛り上がってるなく次は2曲目いくぜ！」

その後は自慢のONE OK ROCKのメドレーを演奏した。

観客のテンションもMAXだった。

こうしてライブは大詰めになってきた。

「残り2曲だが聴いててくれ」

MY FIRST STORYで『Tomorrowland』

残り2曲の内の1つは大人しめの曲を演奏した。

今まで激しい曲ばかりだったのでこういう時の大人しい曲は結構きた。

演奏が終わり観客からも好評のようだ。

「悲しいがこれが最後の曲だ！

これは俺が最も得意で好きな曲だ聴いてくれ

『The Beginning』

最後の曲はONE OK ROCKのThe Beginningを演奏した。

俺のテンションも観客のテンションも最高潮に達した。

そしてライブは終わった。

「今日はありがとう楽しかったぜ」

最後に観客から歓声を貰い、純はステージを去った。

そして楽屋に戻った。

「ああ〜楽しかった〜」

「純くん、お疲れさまライブ良かったよ〜」

「ありがとうございます。」

「また、ライブしてくれる?」

「ええ、勿論!」

俺のソロライブは大成功に終わった。